

1) 教育課程の体系

国際文化学科の教育課程は、卒業認定・学位授与方針に基づき、それぞれの資質・能力がバランスよく身に付けられるように7つの科目群から構成されています。また、学生が将来の進路を明確にし、主体的に学ぶことができるように、英語コース、国際文化コースの履修モデルを示しています。2つのコースともに中学校・高等学校の英語科教員の免許、司書教諭資格及び司書資格、日本語教員試験受験資格、学芸員資格を取得することができます。

英語コースでは、異文化を理解し、高度な英語運用能力を身に付ける教育内容となっています。国際文化コースでは、異文化を理解し、グローバルな視点から地域の課題を解決する力を身に付ける教育内容となっています。

履修モデルは、卒業認定・学位授与方針で示している資質・能力をバランスよく修得できるように、順序性と体系性に配慮されています。順序性と体系性については、各コースのカリキュラムツリーで示しています。

2) 教育課程の編成

1. 専門基礎科目は、国際文化学部の初年次学生に必要な基礎的技能、情報化社会を生きるための知識、初歩的な外国語運用能力、それに加えて、様々な学問の基盤となる考え方について領域ごとに取り組み、領域横断的な視点を養うことで、国際文化学部での専門科目を学ぶための基礎的な知識を習得していく科目です。
2. 学部基幹科目は、異文化交流、国際関係、日本文化、生活文化という4つの着眼点を総合していくことで、国際文化学部での専門科目を学ぶために必要な、日本文化を含めた多様な文化の価値を理解し、そしてまた、地域の国際化や個性豊かな地域文化の振興と創造に資する態度の基礎を養成していく科目です。
3. 学科基幹科目は、異文化を理解し、多文化が共存する現代社会で暮らすために必要な基礎的な知識を修得する科目です。多様な文化を理解できる国際的な視点や言語運用能力を養い、英語コース及び国際文化コースでの学びの核となる領域についての能力を養成していく科目も含まれます。
4. 展開科目は、英語コース、国際文化コースのコースごとに専門的な知識や技能、更に思考力・判断力・表現力を高めていく科目です。また、2つのコースの学生が共通で学ぶ科目として海外研修の科目などを設けています。

英語コースでは、英語で読む・書く・話す・聞くの4技能を修得し、高い言語運用能力を修得します。更に、英語圏の文化、教育、コミュニケーション方法を学ぶことで、異文化を尊重できる柔軟な思考力、異なる文化圏の人とも対話するための論理的な表現力を身に付ける科目です。

国際文化コースでは実践的な英語・中国語・韓国語の学修を通じて、多言語・多文化社会で交流、活躍するための言語運用能力を修得します。更に、国内外の様々な地域の文化・社会についての学びを深め、世界の多様性を理解することで、異文化を尊重できる柔軟な思考力、異なる文化圏の人とも対話するための論理的な表現力を身に付ける科目です。

5. 実践的統合教育科目は、基盤教育にある「やまぐち未来デザインプロジェクトⅠ・Ⅱ」の学びや、「専門演習Ⅰ・Ⅱ」「卒業演習Ⅰ・Ⅱ」等の、それぞれの履修モデルで学んできた専門的な知識や技能、思考力・判断力・表現力、更に主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度のすべてを統合した、学部学科での学びのまとめとなる科目です。
6. 関連科目は、学部での学びをより充実させるために、それぞれの興味や学習目標にしたがって、幅広い視野に立って知識や技能を養成していく科目です。語学に関する科目に加え、文化理解や地域振興に関する科目を配置しています。また、学部で取得できる資格の基礎となる科目も含みます。
7. 免許・資格に関する専門科目は、教職免許や日本語教員試験受験資格・司書など資格取得のために必要となる専門的な知識や技能を学ぶ科目で、修得した単位は認定されますが、卒業要件には入らない科目です。

3) 教育内容・方法

1. 外国語や国際文化に関する専門的な知識や技術を深め、多様な価値を発見し、未来に資する価値をかたちづくるために、専門性を備えた講義を行います。
2. 高度な英語運用能力とプレゼンテーション能力を身に付けるため、アクティブ・ラーニングの要素を組み入れています。
3. 柔軟な発想力と知的好奇心を養い、自らの言語や文化を適切に表現する力を養成するためにプロジェクト科目を設置しています。
4. 主体的な学びを促し、資質・能力を深化させ、基盤教育の「やまぐち未来デザインプロジェクトⅠ・Ⅱ」を発展的に学び、地域の国際化に貢献する力を養うために、課題解決型学習の方法を取り入れています。
5. 国際文化学科での学びの集大成として、多様な文化現象の意義を評価し、判断できる力を養うため、少人数教育による演習を行います。

4) 学修成果の評価

1. 成績評価は、各科目の到達目標に基づいて、厳格に行います。成績評価の到達目標項目とその基準を、ルーブリック等で提示する場合があります。
2. 各科目の具体的学習目標に沿って成績の評価項目とその割合を定め、シラバスに記載します。評価項目の対象は、授業態度、小テスト、自主学習態度、レポート、プ

レゼンテーション、学期末筆記試験、その他（実技、論文や制作物等の成果物等）
となります。

3. 科目によっては、実習先等の成績を参考に成績評価を行うことがあります。